

「キリスト、わが胸に宿る日」

ヨハネによる福音書

16章 1節～15節

説教

軽込 昇 牧師

ペンテコステは、神ご自身である聖霊が弟子たちに降って、主イエス・キリストを救い主と信じる日が始まった日、教会が誕生した日です。聖霊はペンテコステに一度だけ降ったのではなく、今もわたしたちに働いて信仰を与えています。

信仰は勉強でも、修行でも、悟りでもありません。主イエス・キリストへの信仰は、わたしたちの中にあつたものが表に現れたのではなく、徹頭徹尾わたしたちの外から(神から)来ます。聖霊の働きには二つあります。聖霊が降って、第一に、わたしたちははじめて神を信じることができ、第二に、わたしたち自身が何者であるかがはっきりします。

聖霊は目には見えません。手で触ることもできません。しかし、神への信仰が生き生きし、主イエス・キリストのお姿がはっきりさせられるところではいつも働いています。祈るところ、そこには聖霊が注がれています。

神を信じて生きる、それは喜びですが、同時に、涙や苦しみも伴います。涙なしの信仰はありません。詩篇には涙という言葉が何度も出てきます。昔の信仰者も、多くの涙を流し、悲しみ、苦しみだけでなく、罪を抱えながらも、神を信じて歩きました。

聖霊が降ることによってわたしたちは真理—主イエスこそ私たちの救い主—を知ります。わたしたちは、主イエス・キリストがどういうお方であるか知識としていくら知っていても、それだけではわたしたちを生かす真理とはなりません。聖書が真理という場合、それは、キリストがわたしたちを愛してくださる、わたしたちはキリストにつながって生きることができる、という信仰そのものを指します。聖霊はキリストご自身です。愛情を持ってわたしたちを弁護し、執り成してくださる方です。

「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである」(ローマ人への手紙8章26節)。聖霊でさえも、

うめいて執り成すしかないほどにわたしたちの罪は深いのです。そのわたしたちのために執り成しをしてくださる、助け主としての聖霊を送る、それが主イエスの約束です。

「しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが」(7節)。主イエスがここで「ほんとうのことを言う」とおっしゃったことが、ペンテコステに起きたのです。「ほんとうのことを言う」、これは見方を変えればとか、発想を転換すればなどというなまやさしいことではありません。わたしたちの中にキリストのまなざしが注がれていると信じるができる、それがわたしたちの信仰です。

キリスト教の信仰は、エリートの信仰ではありません。誰でも信じられます。わたしたちは神の目には「尊く、重んぜられているもの」とされています(イザヤ書43章4節)。しかし、わたしたちは厄介な存在です。自分では平凡で、つまらない存在と思い込んでいます。信仰に生きている方を見て、素晴らしいなと思い、あこがれますが、その反対に、どうせわたしたちはあの人のような信仰深い人間ではない、というすねた思いが出てきます。神様はこんなわたしでは受入れてくださるはずがない、という強い思い込みです。言い換えれば、神様をわたしたちのはかりで測っていることです。わたしたちの中には、違う、神はそんなことでは赦してくださらない、と絶えず耳元でささやく声があるのです。それを跳ね返す力はわたしたちの努力では出てきません。聖霊によって初めてできることです。

キリストを信じられるということは、そのキリストに照らし出されたわたしたちがはっきりするということです。キリストに愛されているわたしたちがはっきりとする日、それが聖霊を受ける日、ペンテコステ、そしてそれは、キリスト、わが胸に宿る日です。わたしたちは聖霊を与えられて、赦されている、と信じるができます。救いは神からの賜物です。それをいただく価値がわたしたちにはまったくないのに、いただける、だから喜びです。

(記 説教要約奉仕者)